

明末の海商ハンブアン

— タイオワンでの「出会い貿易」を通して—

蔭木原洋*

(令和3年6月21日受付, 令和3年12月24日受理)

The Sea Merchant Hambuan : Through Considering the Trade in Taijouan

KAGEKI Motohiro*

In this paper, the author considered why the sea merchant Hambuan was able to revive the trade in Taijouan, which the Ming Dynasty did not officially approve, after the Battle of Erasmus Bay. The author concluded that Hambuan achieved the revival of the trade in Taijouan with his extraordinary political and negotiation skills.

Moreover, this paper clarified that the trade in Taijouan was unauthorized but was the core of the trade, which dealt in Japanese silver and Chinese raw silk and was the most critical economic issue at that time. Finally, the author thinks that the theme of China-the Netherlands trade in Taiiouan could be used as materials for *Advanced World History*.

Key Words : Hambuan, Zheng Zhilong, Putmans, the Battle of Erasmus Bay

はじめに

明は建国以来, 対外貿易に関して, 朝貢貿易に一本化し, 民間の対外貿易を禁止する海禁政策をとってきた。しかし, 16世紀の国際商業の繁栄が, 明の朝貢貿易体制を揺るがした。明は税金の徴収を条件に, 1530年以降, 広州(図1参照)においては來市(外国船の來華貿易)を, 隆慶元年(1567), 福建省漳州の海澄(月港)(図2参照)においては往市(中国船の出海貿易)を認めた。これが「互市貿易」である⁽¹⁾。しかし, 日本は倭寇の影響で互市貿易を許可されなかった。中国の生糸・絹と日本銀との貿易を望む日中の海商は, 台湾(明代では, 台湾は中国国外の地)をはじめ東南アジアの諸港において取引をおこなった。これが「出会い貿易」のはじまりである。この後, 中国の海商は, 福建の中央官僚や土着官吏に上納金を渡すことにより, 非公認の「出会い貿易」を黙認させていた。

17世紀にはいると, アジア貿易において, ポルトガル・スペインに替わり, オランダが台頭してきた。オランダは, 東南アジア貿易(香辛料)と日中貿易(生糸・絹⇄銀)の中継によって大きな利益をあげた。そのオランダの対中貿易の相手が, 安海(図2参照)を拠点とする泉州幫の鄭芝龍であった。オランダは, 当初は厦門(図2参照)での自由貿易(近代ヨーロッパの自由貿易ではない, 互市貿易の発展段階で, 一つの港で輸出入を行う貿易)を目論んだが, 明朝に拒絶され, 紆余曲折を経て, 海商ハ

ンブアンの活躍でタイオワン(台南の外港安平)(図1参照)で「出会い貿易」(生糸・絹⇄銀)の形で貿易をおこなった。

海商ハンブアンの先行研究としては, 日本では永積洋子の研究がある。永積は, ハンブアンを鄭芝龍との交易の仲介をしたエージェントであると位置づけた。ハンブアンは台湾在住の華僑で, オランダ東インド会社の台湾商館の通訳として活躍し, ゼーランディア城内(オランダのタイオワンでの居城)に居住を許されるほどオランダの絶大な信頼を得ていた人物であると論じた⁽²⁾。

これに対して台湾の翁佳音^{オンジャイン}は, ハンブアンを厦門出身でタイオワンに店を構えた, 海商且つ明朝の元中央官僚であった林亨萬^{りんきょうまん}であると指摘した。その論拠は①ピンイン(発音)②出身地(厦門)③姓氏関係④生存期間(官職期間)であったが, 厦門塔頭^{とうとう}の林家の族譜からの確認は出来ていない⁽³⁾。

こうした永積・翁のハンブアン像に対して, 本論稿では先行研究とは別の角度から海商ハンブアンを分析していきたい。すなわち, ハンブアンがなぜ1633年のエラスムス湾(図2参照)の戦い後(エラスムス湾の戦いは, 明・鄭芝龍が自由貿易協定を実行しないことから明・鄭芝龍とオランダ・海賊劉香の間でおこった), 「出会い貿易」を復活させることができたのかを考察することによって, 永積・翁が論じなかった海商ハンブアンの実像を明らかにし, そして, 従来の研究で見落とされていた, タイオ

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

ワンでの「出会い貿易」の意義を明らかにしたい。

また、高等学校の世界史教育においては、『詳説世界史B』の記述には「16世紀半ばには、北方のモンゴル、東南海岸の倭寇の活動が激化して明を苦しめたが（北虜南倭）、それは貿易の利権を求める人々が明の統制体制を打破しようとする動きであった。（中略）明は従来の貿易体制を続けることができず、（中略）海禁をゆるめて民間人の貿易を許した」とある⁽⁴⁾。すなわち、海禁をゆるめて民間人の貿易を許したという「互市貿易」に関する記述はあるが、黙認された民間人の貿易のなかの「出会い貿易」についての記述はない。

本論稿の史料としている『ゼーランディア城日誌』は、『熱蘭遮城日誌第一冊』江樹生譯注・台南市政府發行・1999年、『バタヴィア城日誌』は、『バタヴィア城日誌』村上直次郎訳注・中村孝志校注1～3・平凡社東洋文庫・1975年、を使用した。この時代の研究では、『ゼーランディア城日誌』と『バタヴィア城日誌』が基礎史料とされ、永積・翁もこの2点の日誌を基本的な史料としている。共にオランダ側の史料であるが、オランダ東インド会社の台湾商館、オランダ東インド会社の根拠地であるバタヴィアにおける中国、台湾、日本、東南アジア各国との交易史料かつ日誌であり、漢文史料よりも詳しい内容である。筆者はこの2点の日誌を基本史料とし、可能な限り漢文史料も用いて本論稿を書き進める。

本稿の論文構成

はじめに

- I オランダの対中貿易の開始
 - II 漳州幫と泉州幫
 - III 1630年のプットマンス・鄭芝龍の協定
 - IV エラスムス湾（罇頭湾）の戦い後の講和
- おわりに

I オランダの対中貿易の開始

オランダは、1602年に東インド会社（VOC）を設立してアジアに進出し、先行していたポルトガルと東南アジアの香辛料と中国の生糸や絹織物の獲得をめぐる争った。オランダは、ジャワのバタヴィア（現ジャカルタ）（図1参照）を根拠地とし、その強固な資本と優勢な海軍力をもとに、アジアにおけるポルトガルの基地、ゴア、マラッカ、マカオ（図1参照）などの攻略を企てた。またオランダは、マニラに来るスペインの銀船の攻撃・拿捕、生糸などの商品をマニラに供給する中国船を襲撃し、その商品を日本貿易にまわして利益をあげた。

『明史』巻325、外国6には、

海澄人の李錦および奸商の潘秀と郭震は長く大泥（パタニ）に居住していて、オランダ人と通じ言葉を習って

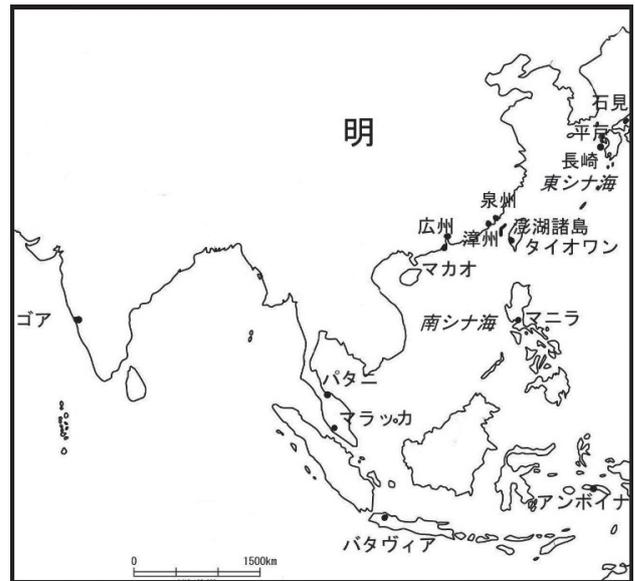


図1 17世紀の東アジア・東南アジアの地図

いた。彼らは中国のことを話した。李錦は「もし中国との交易を求めるのであれば、漳州以外の地はないであろう。漳州的南に澎湖諸島があり、海上の距離はあるが、この地を奪って拠点にすれば、漳州との交易は困難ではない」と話した。オランダの麻韋郎が、「中国の官吏が交易を許さないであろう。どうするのか」と尋ねると、李錦が「税官吏の高案は大変金銀を好むので、彼に厚く賄賂を送れば、彼は特別許可を与えるように皇帝に報告し、官吏も反対することはないであろう」と言ったので、麻韋郎は、「よし」と答えた⁽⁵⁾。

とあり、オランダの対中貿易のきっかけをつくったのは、海澄（図2参照）の出身で漳州幫の李錦、潘秀、郭震（表1参照）であった。李錦等は「大泥（パタニ）」^(註1)（図1参照）にいる時に、オランダ人の首領麻韋郎から中国と貿易する場合はどこに行けばよいかと尋ねられ、「漳州に行け」と答えている。このオランダ人の首領麻韋郎（『明史』巻270 沈有容には韋麻郎）は、東インド会社艦隊指揮官であったワイブルト・ヴァン・ヴェルビクである。1604年、麻韋郎率いるオランダ艦隊は漳州的対岸の澎湖諸島（図1参照）に行き貿易を求めた。李錦の予想通り、税官吏の宦官高案はそれを望んだが、高案の横暴を憎む総兵施徳政、都司沈有容の反対にあい、上手くいかなかった⁽⁶⁾。

麻韋郎の交渉の失敗については、奈良修一は「この政策は福建の「海上の人」の意志を反映したものであることが明らかである。今まで貿易を行って、自分自身の貿易ネットワークを持ち、主導権を握っている海商達がオランダという新参者と高案の貿易を黙認するはずがない。（中略）この事件は高案と海商との海上貿易の主導権をめぐる争いと見て良いであろう」と論じた⁽⁷⁾。

この時点では、福建南部の海商たちにとっては、自分

表1 漳州幫,泉州幫に属する人物と中央官僚

| |
|--|
| <p>漳州幫—李錦, 潘秀, 郭震 (以上3名はオランダとの交易を最初に推進しようとした海商), 李旦 (平戸を根拠地とする海商, 鄭芝龍と義理の親子関係, カトリック信者), 許心素 (シムソウ, 李旦の後を継いだ漳州幫の首領), 蘇鳴崗 (ベンコン, バタヴィアを本拠地とする海商), ハンプアン (漳州幫の首領), ヨクシム, ヨホ, ヌーコエ (以上3名はハンプアンの配下の漳州幫の海商), 顔思齊 (台湾を中心に活動した海賊, 鄭芝龍に自分の海賊集団を引き渡す, カトリック信者), 劉香 (ヤングロウ, 元鄭芝龍の部下の海賊)</p> <p>泉州幫—鄭芝龍 (泉州幫の首領, 元海賊, カトリック信者), 李魁奇 (元鄭芝龍の部下の海賊), ガンペア, ビンディオック (以上2名は鄭芝龍配下の泉州幫の海商)</p> <p>中央官僚—熊文燦 (福建巡撫, 巡撫は省の最高行政官, 在任 1628~1632), 鄒維璉 (福建巡撫, 在任 1632~1635), 曹履泰 (泉州同安知県, 在任 1625~1630), 俞咨皋 (総兵, 総兵は最高軍司令官, 在任?)</p> |
|--|

たちが確保しているポルトガル (マカオ)・スペイン (マニラ) との貿易ネットワークが重要で, 漳州幫出身の李錦が仲介し, 税官吏の宦官高崇が主導する澎湖諸島での新たなオランダとの貿易は, 彼らの貿易ネットワークを破壊するものであったことが伺われる。また, 福建南部の官吏たちにとっても好ましいものではなかった。

その後オランダは, 澎湖諸島を根拠地とし, 対中貿易を推し進めようとするが, 明側のクレームで, 1624年に台湾南部のタイオワンにゼーランディア城を築き, ここに根拠地を移した。この明側のクレームの根拠は, 当時明朝の官庁が置かれた澎湖諸島は中国の領土内で, 官庁が置かれていない台湾は「華外の地」, すなわち中国の領土外であるという考え方であった。澎湖諸島からタイオワンへの根拠地の移動については, 初代オランダ東インド会社・台湾長官ソク (在任 1624~1625) は, 当時盛んにタイオワンで行われていた中国と日本との「出会い貿易」を阻止する目的もあったことを強調している⁽⁸⁾。

またポルトガルのマカオ—平戸ルート, スペインのマニラ—長崎ルートを遮断するには, 台湾海峡に臨むタイオワンはうってつけの拠点であった。この交渉に活躍したのがシナカピタンと呼ばれ, 当時日本の平戸に根拠地を持っていた中国海商である李旦 (表1参照) である。李旦は泉州の出身であるが, その中国での活動拠点は廈門にあり, 彼は漳州幫に属していた⁽⁹⁾。

李旦は, 自身の交易に都合の良いようにオランダを利用し, 両者はタイオワンで「出会い貿易」を行うようになった。しかしこの貿易は, オランダにとっては非常に不満の残る貿易形態であった⁽¹⁰⁾。

II 漳州幫と泉州幫

1 漳州幫・許心素

李旦の死後, タイオワンでの「出会い貿易」で活躍したのが, 彼の腹心であった許心素 (シムソウ) である。許心素は, 漳州幫 (表1参照) であった。翁佳音は, 福建省南部の出身の商人を福佬海商と呼んでいるが, 当時の福佬海商は, さらに, 廈門を根拠地とする許心素を首領とする漳州幫と, 安海を根拠地とする鄭芝龍を首領とする泉州幫 (表1参照) とに分かれていた⁽¹¹⁾。

幫は中国の社会的組織の一つで, 方言・地縁・血縁 (義兄弟も含む) を中核とした組織である。幫は行政区分の枠とは違い, 廈門や同安は行政区分では泉州府に属するが (図2参照), 廈門湾をはさんで漳州と方言・地縁で繋がっており, 幫では漳州幫に属する。両グループは, 商業利益で手を組むこともあるが, 一度争いがおこると, 出身地の幫の首領の下に集まり争った。当時の漳州幫と泉州幫との争いは, 明朝から水師把総 (総兵の下の中級武官) に任ぜられた漳州幫の許心素が, 総兵 (軍司令官) 俞咨皋 (注2) と手を組み, 許一族と漳州幫がタイオワンでの「出会い貿易」を独占していたのが原因であった⁽¹²⁾。

明 (中国) の官吏は, 科挙に合格した中央官僚 (福建巡撫・総兵等) と土着官吏 (多くは中央官僚の招撫による海商・海賊の買官) に分けられる。中央官僚は大きな権限を持っているが, 2~3年で転勤するため, 土着官吏の存在は, 福建等においては, 対外貿易等をおこなう上では欠かせない存在であった。



図2 17世紀の廈門を中心とする地図

土着官吏 (水師把総) になった許心素の「出会い貿易」は, この貿易に参加できない泉州幫の商人, 及びこの貿易を黙認する総兵俞咨皋のことを快く思わない明朝の官僚 (福建巡撫熊文燦) にとっては非常に不満であった。またオ

ランダも、中国での買い付け資金を前貸ししているにもかかわらず、李旦同様、自己の利益だけを図る許心素には強い不満を持っていた⁽¹³⁾。

2 泉州同安知県曹履泰からみた許心素

曹履泰は科挙合格後、泉州同安知県（図2参照）（在任1625～1630）として赴任してきた中央官僚である。泉州同安県は行政区分では泉州府に属するが、幫では漳州幫に属している。

曹履泰は清廉実直な官僚で、同安知県として赴任以来、漳州幫の首領である許心素と総兵俞咨臯が、海賊と癒着して、オランダとの「出会い貿易」を行っていることを問題視していた。許心素は漳州幫ではあるが、泉州同安県の出身である。『靖海紀略』は、曹履泰の公牘集（公文書集）であるが、そのなかに曹履泰から李任明（係前令）への公文書として、

丁卯（1627年）4月に、鄭芝龍が中佐（厦門）を侵略した。9月に入って、総兵の俞咨臯は、オランダを利用して鄭芝龍を撃とうとしたが、オランダは鄭芝龍に敗れた。12月に入って、厦門の官船や兵器はすべて鄭芝龍に奪われ、福建には激震が走った。しかし、泉州の郷紳たちはなすすべもなく、対策の議論もなかった⁽¹⁴⁾。

（靖海紀略卷之二）

とある。俞咨臯—許心素ラインが、自分たちと「出会い貿易」をおこなっているオランダを利用して、鄭芝龍を撃とうとしたが、逆に鄭芝龍に敗れた。そして、鄭芝龍によって官船や武器も奪われるという状態になったが、泉州の郷紳（有力者）は何の手立ても施さなかった。これは、泉州の郷紳たちも、俞咨臯と組んだ許一族と漳州幫が、「出会い貿易」を独占していたことに不満を持っていたからだと考えられる。その後、総兵俞咨臯は失脚し、鄭芝龍は明朝に帰順することになったが、泉州幫である鄭芝龍の招撫を福建巡撫熊文燦に献策したのは、泉州同安知県曹履泰であった⁽¹⁵⁾。

3 泉州幫・鄭芝龍

鄭芝龍は、若くして故郷の福建省泉州南安県石井（図2参照）を飛び出し、ポルトガルの対中貿易の根拠地マカオで働き、この時カトリックの洗礼を受け、ニコラスという洗礼名を得た。18歳の時に父を失い、母方の伯父で海商・海賊であった黄程を頼った。その後日本の平戸に渡り、田川七左衛門の娘と結婚し、生まれたのが鄭森（鄭成功）である。平戸に根拠地を持つシナカピタン李旦と義理の親子関係を結び、李旦死後はその財産を引き継いだ。白井康太は「李旦の没後は、彼が掌握していた東シナ海域の貿易利権を、福建南部の漳州湾・厦門を主要拠

点とする許心素と、平戸を主要拠点とする鄭芝龍が分割するような形になっていた。その後はこの両者が、李旦の残した東シナ海域貿易の掌握をめぐる、対抗を続けることになる。」と論じた⁽¹⁶⁾。

この白井論をより焦点化すると、李旦死後、タイオワンでの「出会い貿易」をめぐる、漳州幫の首領許心素と泉州幫の首領鄭芝龍の争いが始まったと言える。

鄭芝龍は、タイオワンのオランダ商館の通訳として働いた後、漳州出身の海賊顔思齊（表1参照）の海賊船団を引き継ぎ、南海を荒らしまわる海賊に変貌していった。泉州幫である鄭芝龍が漳州幫の李旦、顔思齊の後を継ぐことが出来たのは、海賊集団は幫にこだわらない集団（ポルトガル人や日本人等の外国人をも含む）であったこと、三人の日本の平戸での関係、そして三人共にカトリックの信者であったことが影響しているものと思われる⁽¹⁷⁾。これらのことから、鄭芝龍集団の核となるのは泉州幫であるが、単に泉州幫だけにとどまらない集団であったと言える。

1628年初め、鄭芝龍と李魁奇（表1参照）・鍾斌等が率いる海賊集団は厦門を攻撃し、許心素を殺し、「出会い貿易」の主導権を握ろうとした。その後、福建巡撫熊文燦の招撫に応じた鄭芝龍は、海防遊撃、総兵官（土着官吏）となった。鄭芝龍は、熊文燦、鄒維璉の二代の福建巡撫の庇護の下で、明朝の海軍も利用して、李魁奇・鍾斌を順次倒して力を伸ばしていった⁽¹⁸⁾。

こうした状況の中で、許心素が殺された後、漳州幫の首領となったのがハンブアンである。

III 1630年のプットマンス・鄭芝龍の協定

1 協定の経緯

鄭芝龍が許心素を殺した33年後の1661年12月21日の『バタヴィア城日誌』に、オランダ東インド会社・台湾長官ハンス・プットマンス、鄭芝龍との間に自由貿易についての協定を結ぶとして、

委員はここにおいてかつてフォルモサ（ポルトガル語で美しい島、台湾のこと）に対し主張をなしたることなき国性爺（鄭成功）の父一官（鄭芝龍）と、一六三〇年に締結したる契約を殿下（鄭成功）に提示し、他の条件をもって協定をなさんことを請いしが、彼（鄭成功）は父（鄭芝龍）に付きてもその契約に付きても知る所なし、我（鄭成功）はこの地と城砦とを得んことを欲す⁽¹⁹⁾。

と書かれている。1661年、鄭芝龍の息子鄭成功が、台湾を根拠地にしようとして、ゼーランディア城を攻略した。鄭成功の父である鄭芝龍は、オランダの台湾支配について何の異論もなく、オランダと平和裏における自由貿易協定を結んだ。その例に倣って、オランダは鄭成功に対

しても寛大な講和条約を結ぶことを懇願した。

この1630年1月2日に締結された契約は、鄭芝龍とオランダが連合して、廈門を占拠していた海賊李魁奇を打ち破る際に結ばれた協定である。李魁奇は、鄭芝龍と行動を共にしていた海賊で、1628年に福建巡撫熊文燦に鄭芝龍とともに招撫された。鄭芝龍は明に帰順したが、李魁奇は招撫に応じなかった。李魁奇は、明に帰順した鄭芝龍に対して不満を持ち、鄭芝龍を廈門から追い出した。その後、李魁奇は廈門を占拠し、軍門によって招撫されて、官吏に取り立てられた。このことは、明朝の中央官僚にとっては、鄭芝龍でも李魁奇でもよく、オランダから日本銀を獲得するために働く、都合の良い土着官吏が欲しかっただけであることがわかる。また、熊文燦からの招撫には応じなかった李魁奇ではあるが、鄭芝龍を廈門から追い出したことで、対オランダ貿易を牛耳ることが出来ると考えて、明朝へ帰順したのであろう。

その後オランダは、李魁奇が対中貿易を持ちかけてきたので、廈門で交渉したが上手くいかなかった。そこでオランダは、李魁奇によって廈門を追い出された鄭芝龍との提携に乗り換え、鄭芝龍とプットマンスの間で上記の自由貿易協定が結ばれた。鄭芝龍・オランダ連合は、海賊鍾斌とも手を組んで李魁奇を打ち破り、その後、鄭芝龍は鍾斌をも滅ぼした。

2 海商ハンブアンの登場

ハンブアンについては、中国史料における記述はなく、『ゼーランディア城日誌』と『バタヴィア城日誌』に記述されている。『ゼーランディア城日誌』は、オランダ東インド会社の台湾商館が書いたバタヴィア総督への報告書であり、『バタヴィア城日誌』は、オランダ東インド会社の最高経営機関である「17人会」への報告書である。そういった意味では、『ゼーランディア城日誌』の方が、「出合い貿易」の最前線の出来事が記されており、「17人会」に送る『バタヴィア城日誌』より、タイムリーで具体的な記述がなされている。

ハンブアンがオランダ関係史料で最初に登場するのは、『ゼーランディア城日誌』1631年4月5日の条⁽²⁰⁾である。台湾長官プットマン스가、オランダ東インド会社所有のジャンク船（鄭芝龍が略奪したジャンク船であろう）の引き渡しを鄭芝龍に求めたことに対して、鄭芝龍がジャンク船の処理を、ハンブアンの名義でおこなって欲しいと提案してきた、そうでなければ、鄭芝龍は大官の大きな怒りに遭うだろうという記述がなされている。鄭芝龍がこうした提案をした理由は、鄭芝龍自身が東インド会社のジャンク船を引き渡す過程で、1630年1月2日のプットマンズと土着官吏にすぎない鄭芝龍との間の自由貿易協定が露見し、中国大官（福建巡撫熊文燦）の怒りを買うことを鄭芝龍が恐れたからである。プットマンズと鄭

芝龍との間の自由貿易協定は、明朝があずかり知らない、土着官吏の鄭芝龍が勝手に結んだ協定であった。なぜなら、海禁政策を国是とする明朝の中央官僚の福建巡撫熊文燦が、自由貿易などを許可するはずがないからである。そのため鄭芝龍は、この仕事をタイオワンに店を構え、伝統的にオランダとの「出合い貿易」の中心的存在であった漳州幫の首領ハンブアンを利用して実行させようとしたのである。ハンブアンにとっても、許心素の死後、低迷していた漳州幫の勢力挽回の絶好のチャンスと考えたに違いない⁽²¹⁾。

3 エラスムス湾（罇頭湾）の戦い

ハンブアンが中蘭関係で次に登場するのは、1633年9月のエラスムス湾の戦い後である。エラスムス湾の戦いは、明・鄭芝龍が、前述した自由貿易協定を実行しないことから起こった。オランダは鄭芝龍から離れた海賊劉香（表1参照）と提携し、打倒鄭芝龍、そして武力による自由貿易獲得を画策した。この劉香は漳州出身である。しかしオランダ艦隊は、劉香のジャンク船50～60艘とともにエラスムス湾で停泊中、約150艘の鄭芝龍率いる火船と大戦艦を中心とする艦隊に急襲されて大敗した。劉香はいち早くプットマンズを見捨てて南方へ逃走し、残されたプットマンズは、命からがらタイオワンに逃げ帰った。

IV エラスムス湾の戦い後の講和

1 明・鄭芝龍側からの講和申し入れ

エラスムス湾の戦い後の講和は、その後の中蘭貿易の基本路線、すなわちエラスムス湾の戦いにより途絶えていた「出合い貿易」の復活を決定した。この重要な講和の経過をハンブアンの関りを中心に分析していく。

『バタヴィア城日誌』1634年2月19日には、

長官プットマンズの報告によれば、（エラスムス湾の戦い後）該海岸を去りし後、事情一変し、中国人は熱心に講和を希望し、彼我の間に生じたる悪感情を捨て、國務會議員の承認を得て自由なる貿易を許すべきこと疑いなし。中国人の一致したる報道によれば、一官（鄭芝龍）自身も一切の手段を尽くして我等に和平および要求せる貿易を許さんことを軍門その他大官に勧めたり。一官はこれが道を開かんと欲し、商品を積みたるジャンク船二艘に総督、商務員パウルス・トラウデニウス（第6代台湾長官）および当地のシナ頭人ベンコン（蘇鳴崗）宛の書簡を託して当地に派遣したるのみならず、台湾に在る重立ちたる中国商人ハンブアンと称する者をして、密かに長官プットマンズに説きてまず和平および自由貿易を中国に要請せば、我等の希望と中国の沿岸における敵対行為の目的を達すること疑いなしと言わしめたり⁽²²⁾。

とある。エラスムス湾の戦いで完敗したプットマンズにとって意外なことに、中国側から講和を求めてきたのである。プットマンズの方から和平と自由貿易を要請すれば、オランダ念願の自由貿易さえも許可するというのである。この時鄭芝龍は、中国商品（生糸・絹織物）を手土産に、バタヴィア総督（ヘンドリック＝ブラウエル）、商務員パウルス・トラウデニウス、そして、バタヴィア在住の中国人リーダーの蘇鳴崗（ベンコン）（表1参照）宛の書簡を託して講和を求めた。しかし、鄭芝龍の真の頼みの綱はタイオワンにいる「重立ちたる（重要な）中国商人ハンブアン」であった。鄭芝龍は、講和への道は、バタヴィア総督よりも好戦的なプットマンズを説き伏せることであると考えていた。その中で鄭芝龍が、対オランダ貿易でライバルである漳州幫のハンブアンを利用しようとしたのは、プットマンズのハンブアンに対する信頼を鄭芝龍が期待したからであろう。

2 明・鄭芝龍が講和を求めた理由

中央官僚の福建巡撫鄒維璉（熊文燦の後任）と土着官吏である鄭芝龍は共に、北辺の女真族に対する軍事費（銀）を早急に獲得することが必須であった。

福建巡撫は、明朝の軍事費である銀の流入において、一番重要な地域（厦門）を管轄する巡撫である。そのため歴代福建巡撫は、中央政府で、軍事費の仕事を担当する官庁である太僕寺たいぼくじの少卿（次官）からの昇任がほとんどであった。

鄭芝龍が、自由貿易をオランダにちらつかせたのも、早急に講和し、オランダから日本銀を獲得する必要に迫られていたからである。そして鄭芝龍は、日蘭貿易において問題になっていたタイオワン事件が、エラスムス湾の戦い前に解決し、オランダの対日貿易が復活したという情報をつかんでいた。すなわち、オランダが日本銀をタイオワンに運んで来ることが出来るようになったことを知っていたのである⁽²³⁾。鄭芝龍にとって、タイオワンでの「出会い貿易」の再開は、おそらくエラスムス湾の戦い以前からの既定路線であった。

タイオワン事件は、プットマンズの前任の台湾長官ヌイツが、貿易に来る外国船に関税をかけたことから生じた。すなわち、ヌイツはタイオワンで「出会い貿易」を行っていた日本船に関税をかけたのである。これに反発したのが日本の朱印船の船主であり、長崎代官でもあった末次平蔵である。1628年、関税を支払わないことに対して出航を許可しない台湾長官ヌイツを、末次平蔵の朱印船船長浜田弥兵衛が人質にとったことから泥沼化し、日蘭貿易はストップした。

1632年9月にバタヴィア総督ジャック＝スペックスがタイオワン事件の原因となった前台湾長官のヌイツを事

件の責任者として日本に護送したことで、將軍徳川家光はオランダの家臣としての誠意に満足し、タイオワン事件を善意に判断してオランダ人を解放し、オランダ船の出帆、平戸商館の封鎖を解いた。

『バタヴィア城日誌』1634年2月19日には、

前に掲げたるハンブアンは長官および台湾評議会員の勧誘に従い、病みたる捕虜二十一人を伴い中国に向かい出帆せり。彼は軍門その他の中国の大官に招かれたる際、我等の好意を十分に伝え、口頭をもって我等の願意を通じ、また一官（鄭芝龍）に書翰を交付するはずなり。書翰の趣旨はこの書翰を受領したる上、現在の北季節風期の終了前（北季節風は台湾海峡に吹く強風で、この時期に平戸へ航行するのは非常に困難であった。しかし、平戸からタイオワンへの航海には都合の良い風であった）に彼（鄭芝龍）がしばしば我等に約束したる、自由にして阻害せられざる中国貿易を許すことに努力すべし。もしこれを為さざる時は、我等は開始したる戦争を継続するのみならず、海賊の援助を受けて一層激烈にこれを行うべしと言う⁽²⁴⁾。

とあり、このようにプットマンズがハンブアンを中国に送ったのは、日蘭貿易が復活した以上、一刻も早くタイオワンに中国商品（生糸・絹織物）を輸入する必要があったからである。それゆえプットマンズは「講和の条件は、北季節風期の終了前に、中蘭貿易において、自由貿易が約束されることである。」と強硬な姿勢をとったのである。早期の講和は、北季節風期が終了するや否や、台湾海峡の航行が安全な時に、大量の中国商品（生糸・絹織物）を仕入れ、その商品をタイオワンから平戸へ輸送するためである。しかし、『ゼーランディア城日誌』1633年12月9日⁽²⁵⁾には「この中蘭交渉の成否がオランダ側（プットマンズ）のハンブアンに対する信頼の証になる。」とあり、プットマンズはまだ漳州幫のハンブアンが、この講和をまとめるだけの力量（自由貿易を中国に認めさせる）があるとは認識しておらず、全面的な期待はしていなかった。

プットマンズの全面的な期待がない中、ハンブアンは奮闘する。ハンブアンはプットマンズが講和の条件とする、北季節風期終了前の自由貿易協定の実行を建前としつつ、福建巡撫鄒維璉、土着官吏鄭芝龍との落としどころを探っていた。自由貿易など許可できない中央官僚の福建巡撫鄒維璉には、「書簡」を以て交渉するのではなく「口頭」でおこない、土着官吏鄭芝龍には「書簡」を以て交渉したのである。ハンブアンは、福建巡撫鄒維璉にはプットマンズの要求する自由貿易の内容を「書簡」では見せられず、そのことは誤魔化しながら「口頭」で説明したと考える。なぜなら福建巡撫鄒維璉に「書簡」を以

ですと、土着官吏鄭芝龍が勝手にプットマンズと結んだ自由貿易協定が露見するからである。このことは前述した1631年4月5日の『ゼーランディア城日誌』にある、鄭芝龍がオランダのジャンク船の処理をハンブアンの名義でおこなって欲しいと提案した件と同じで、ハンブアンはその辺の事情はよく分かっていたのである。しかしハンブアンは、鄭芝龍に対しては、「書簡」で1630年の自由貿易協定を確認しながら、プットマンズの意向を伝えたと考えられる。ハンブアンは一刻も早い中蘭貿易の復活を願う福建巡撫鄒維璉・土着官吏鄭芝龍とオランダ東インド会社・台湾長官プットマンズ双方の意向を考慮して、貿易の形はともかく中蘭貿易の復活、すなわちタイオワンでの「出会い貿易」復活のために巧みな交渉を行ったと思われる。

またハンブアンは、鄭芝龍とともに泉州海道^(注3)を訪問している。『ゼーランディア城日誌』1634年3月7日には、

ハンブアンは安海に入った後、鄭芝龍とともに泉州の海道を二度訪問した。彼らは、中国がオランダとの和平を願うなら北季節風前にタイオワンにジャンク船を送らなければならない。そうしなければ、次の季節には中国がオランダの攻撃に遭うことを強調した⁽²⁶⁾。

とある。ハンブアンと鄭芝龍は、泉州海道に、北季節風前のタイオワンでの「出会い貿易」再開を強く訴えかけたのである。

3 プットマンズの和戦両面政策

プットマンズは、明・鄭芝龍との講和が成立せず、オランダが望む自由貿易が許可されない場合には、海賊劉香と再び連合して、明・鄭芝龍と戦うつもりであった。そのため、ヤハト船^(注4)ウィーリングゲンとジャンク船を派遣し、南方に逃げた海賊劉香を捜索させた。『バタヴィア城日誌』1634年2月19日⁽²⁷⁾。

その一方でプットマンズは、明・鄭芝龍との講和のために、前述したようにハンブアンを安海に行かせているのである。すなわちプットマンズは、和戦両面作戦をとっていたのである。

ハンブアンが、講和交渉のため安海に到着した時、鄭芝龍は艦隊の装備に忙しかった。広東の軍門は、この艦隊を鄭芝龍に指揮するように頼んだが、鄭芝龍は自分の部下のティチャムビンに指揮権を与えた(『ゼーランディア城日誌』1633年12月30日)⁽²⁸⁾。この中国艦隊の装備で、中国側もオランダに対して和戦両面策をとっていることがわかる。しかし鄭芝龍は本心では講和を切望しているので、この艦隊の装備は、プットマンズやハンブアンに対する一種のポーズであった。それは、広東の軍門の要請にもかかわらず、自分は直接指揮をとらず、部下のティ

チャムビンに指揮をとらせたことでわかる。

また明・鄭芝龍側は、オランダとの貿易については、ハンブアンに対して何の説明もなく、オランダの望む自由貿易をさせなかった。そして、明・鄭芝龍側は、特定の商人だけにタイオワンに行かせて交易を開始させ、その交易には高い税金(交易許可証)をかけた。特定の商人以外でタイオワンにやってくる商人は、オランダが予想した通り、鄭芝龍の仲間の商人(泉州幫)ばかりで、その他の商人は、全くタイオワンに来なかった。また、エラスムス湾で中国側の捕虜になったオランダ人のこともわからない状態だった(『ゼーランディア城日誌』1634年1月22日)⁽²⁹⁾。

福建巡撫鄒維璉・鄭芝龍は自由貿易協定を実行する気はなく、交易許可証をもった特定商人をタイオワンに行かせることで、表向きは明朝公認の「互市貿易」の形を取り、実質は鄭芝龍の息のかかった泉州幫の海商をタイオワンに行かせ、「出会い貿易」をおこなった。

4 中国側の講和条件

中国側の講和に関する条件は、『ゼーランディア城日誌』の1634年3月7日には、

オランダのハンブアンを通しての中国の大官への贈答品は非常に喜ばれた。中国の大官達は、①オランダが直接中国沿岸に行かないこと(自由貿易の禁止)②エラスムス湾での損害賠償(皇帝への言い訳のため、メンツ)を実行してくれたら、タイオワンでの貿易を認めるというものであった。それは、都に連れていかれたオランダ人捕虜の解放にも役立つというものであった。また、ハンブアンはオランダが福州、泉州、漳州の海道と廈門の海防知県と遊撃(武官)に丁寧な手紙(講和の手紙)を書くことを助言している。中国の大官達は、オランダの状況に対しては他の官僚より自分たちはよく理解しているので、皇帝に漳州海道等に出した講和の手紙を同封して、講和と貿易についての陳情をしよう。また、鄭芝龍はハンブアンに個人的に、「戦争は有益ではなく、早い対応をすれば、オランダがバタヴィアから援軍を要請し、戦争を継続するという話はなくなる」と話した⁽³⁰⁾。

とある。このプットマンズに「丁寧な手紙」(エラスムス湾の戦いに対する謝罪の手紙)を書かせることを助言したところに、メンツを重んじる明朝の中央官僚に対する交渉術を知り尽くしているハンブアンの政治力を窺い知ることができる。

5 タイオワンの状況

ハンブアンの中国での交渉は迅速には進まない。『ゼーランディア城日誌』1634年2月3日のハンブアンのプッ

トマンスへの書簡では、

タイオワンにいる劉香の手下の海賊（エラスムス湾の戦い後タイオワンに逃げ込んだ）を釈放せずに、彼らをタイオワンに留置しておいてほしい。その方がタイオワンに来る中国商人の貿易が上手くいく。そして、中国商人には日本銀で支払いをしてほしい。また、関税は徴収しないで、中国商人の収益性を高いものにしてほしいと言ってきた⁽³¹⁾。

とある。ハンブアンは劉香の手下の海賊が釈放されることで、台湾海峡を通る中国のジャンク船が襲われることを心配している。そして、タイオワンに来る中国商人には、胡椒などの現物ではなく日本銀での支払いと、関税を掛けないでほしいと要求した。これは、ますます勢力を拡大してくる後金（女真族）に備え、福建巡撫鄒維璉・鄭芝龍が軍費としての銀を早急に獲得したかったからである。

『ゼーランディア城日誌』1634年2月8日、9日には続けて、

タイオワンから中国に向けて出港する泉州幫のビンディオック兄弟（表1参照）のジャンク船には、胡椒や象牙といった現物も含まれていたが、大部分は日本銀が積載されていた。天候が良ければ、10～12日以内に、大量の生糸とその他の注文品を積んでタイオワンに戻ってくる。そしてプットマンスと台湾評議会は、ハンブアンとヌーコエ（表1参照）には、需要のないタイオワンの倉庫に眠っている胡椒で中国との交易を行わせることを決議し、2月9日にハンブアンの船は、胡椒を積んで中国に渡った。そして、プットマンスはこの胡椒で、ハンブアンが大量の生糸・絹織物を仕入れてくることを疑わなかった⁽³²⁾。

とある。ここで注目したいのは、プットマンスがハンブアンの助言で、ビンディオック等泉州幫の海商には、生糸・絹織物の購入を、銀での支払いで行ったが、助言者のハンブアンやヌーコエ等の漳州幫には、銀ではなく、タイオワンの倉庫に眠っている現物の胡椒での買い付けを行わそうとしている点である。ハンブアンは、ビンディオック等泉州幫の海商同様、銀での取引をしたいのはやまやまでであるが、ここではプットマンスの信頼を得て、講和がうまく運ぶためには、意に沿わない胡椒での生糸・絹織物の買い付けを行おうとしたのだらう。

『バタヴィア城日誌』1634年4月4日には、

またハンブアンと称するタイオワンの中国商人、近日生糸・絹織物・磁器その他中国商品を積みてチンチェウの川（廈門）より同地に来るはずなり。同人は前に述べ

たるごとく、長官ハンス・プットマンスの勸告により、従来一切の紛擾を調停し、自由なる中国貿易を促進せんため中国に赴き、同長官の書翰を大官一官（鄭芝龍）に届けしが、何の返答なく、また前に掲げたるジャンク船のタイオワンに来ることを許し、前記ハンブアンその他の商人等に交易許可証三通を交付し、我等と自由に通商せしめたるほか、別に好結果なかりき。右貿易の仮許可が我等を欺くために与えられ、又虚偽と奸詐に基づけることは、タイオワンに在る多数の人の主張する所なるが、また中国人が非常に多数の船をマニラに送り、同所に大輸送をなすことによりて、一層明白なり⁽³³⁾。

とある。ハンブアンは、自由貿易を鄭芝龍に実行させるためにプットマンスの書翰を持って中国に渡ったのだが、鄭芝龍は何の返答もせず、中国側は、ハンブアンを通してタイオワンへの交易許可証三通をビンディオック、ヨホとヨクシム（表1参照）に渡した。前述の特定商人はこの三人である。しかし、その交易許可証の交付は、鄭芝龍のオランダを欺く作戦であるとタイオワン在住の多数の人間が主張したとある。この人たちは鄭芝龍に反発する、おそらく漳州幫の商人たちである。福建巡撫鄒維璉・鄭芝龍はオランダの要求する「自由貿易」を許可することはできなかった。ビンディオック、ヨホ、ヨクシムの三人の商人に交易許可証を交付することで、タイオワンでの貿易を、形の上では明朝公認の「互市貿易」に組み入れ、実際は鄭芝龍配下の泉州幫による「出会い貿易」をおこなったのである。また、明朝側の中央官僚である福建巡撫・鄒維璉、土着官吏・鄭芝龍は、逼迫する対女真族との軍事費として日本銀だけでなくマニラ銀も欲しい為、オランダのライバルであるスペイン・マニラ貿易をおこなった。しかし、自由貿易によって、対中貿易の独占を図るオランダにとっては、講和交渉中における中国船のマニラ貿易は、オランダへの裏切り行為であった。

このような時、エラスムス湾の戦い後、南方に逃げていた海賊劉香が、ペドラ・ブランカ（広東湾付近）およびローフェルス湾の付近で停泊し、大ジャンク船30艘を捕獲し、奇計を用いてヤンクシウという町を占領していた。そして、劉香を追跡していた鄭芝龍の部将の一人アンボーイと二回戦い、二回とも勝利を得、アンボーイを敗走させ、再び大艦隊を編成してきた（『バタヴィア城日誌』1634年4月4日）⁽³⁴⁾。

プットマンスは、劉香が勢力を挽回してきたので、ハンブアンが中国での交渉に努力しているにもかかわらず、両面政策をまだ捨てきれないでいた。両面政策を捨てきれずにいるプットマンスの心を、明・鄭芝龍との講和に傾けたのは、ハンブアンであった。『バタヴィア城日誌』1634年4月19日には、

スヒップ船^(注5)アウデワートルは、その出帆後海上

において前記ハンブアンに遭遇し、その積荷を知ることを得たれば、これとともにタイオワンに帰航し、同所にてハンブアンの持ち渡りし生糸をその積荷の他に受け取ることとなり、生糸・・・ピコル^(注6)を積取り、全部の積込みを了するはずなりしが、同月八日南よりの強風吹き波浪高かりしたため、この上の積取りを断わり、季節風止みたれば西風を利用してバタヴィアに向け航海するの余儀なきに至れり。前記スヒップ船アウデワートルの出帆後、三月六日に残存せし現品はタイオワンの帳簿によれば、六十万二千百三十七グルデン七ストイフェル三ペニング^(注7)の額に上れり。

このうち、右期日後にハンブアンの持ち来たりし生糸のうち、スヒップ船アウデワートルに積み込みたるもの・・・グルデンを除けば、新たに仕入れをなすためタイオワンの商館に残りたる金額は五十五万七千六百七十六グルデン十ストイフェル二ペニングに達す⁽³⁵⁾。

とある。ハンブアンは、オランダの望む「自由貿易」は中国に約束させることは出来なかったが、大量の中国商品を持ち帰った。そして、アウデワートル号がバタヴィアに中国商品を積んで帰った後も、タイオワンには巨額の資金が残った。この中国商品の買い付け資金になったのは、前述したタイオワンの倉庫に眠っていた胡椒である。あの胡椒でハンブアンは大量の生糸・絹織物の購入に成功したのである。おそらくこのことで、プットマンズのハンブアンに対する信頼は揺るぎないものになり、両面政策もかなり明・鄭芝龍側に傾いたと考えられる。

ここで着目したいのは、ビンディオック、ヨホとヨクシムは交易許可証を持っていたが、ハンブアン自身は明朝の交易許可証を持たずに、大量の生糸・絹織物の購入をおこなっていることである。すなわちハンブアンは互市貿易の形態から外れた貿易、「出会い貿易」をおこなっていたのである。

ハンブアンは無事に大量の中国商品を積んでタイオワンに帰ってきたが、ハンブアンに続こうとしたジャンク船は、海賊の劉香を恐れてなかなかタイオワンに到着できないでいた。劉香は、オランダが中国との講和交渉を行っている時に、漳州の中国船を襲撃し、澎湖諸島に停泊した。そこから劉香はプットマンズに書簡を送り、自分と提携して中国とポルトガルを徹底的に打ち破ろうと誘いを掛けてきた。それに対してプットマンズは、オランダは中国との講和交渉中であり、劉香に澎湖諸島を離れ、交易許可証を持っている中国船（ビンディオック、ヨホ、ヨクシムの船）を襲わないように要請した。そして、劉香がこのことを実行するならば、中国との講和交渉の成否にかかわらず、オランダが劉香を支援するという返答を行った（『バタヴィア城日誌』1634年4月29日）⁽³⁶⁾。

この返答で、劉香は、エラスムス湾の戦い以後も自分

との提携を模索していたプットマンズの方針が、かなり福建巡撫鄒維璉・鄭芝龍寄りになっていることを感じたに違いなかった。

このようなプットマンズの態度にしびれを切らせた劉香は、通訳ラッコの手引きで1634年4月8日、ゼーランディア城を襲撃する。この襲撃は失敗に終わり、プットマンズの両面外交の方針は、中国との講和に決したのである。プットマンズの両面外交政策に対する漳州幫のハンブアンと泉州幫の鄭芝龍の粘り勝ちであった。

ハンブアンは、劉香の襲撃後、かねてより希望していたゼーランディア城中に居住を許可された。この後も鄭芝龍と海賊劉香との戦いは一進一退が続いた。その間、交易許可証を持たないハンブアンやヌーコエ等の漳州幫は、ゼーランディア城中に保管してあったハンブアンの資金を返却してもらい、その資金で中国で生糸・絹織物の買い付けを行った。また、タイオワン在庫の胡椒での生糸・絹織物の買い付けを要求されるが、それも黙々とこなし、プットマンズの全幅の信頼を受けることになっていった（ゼーランディア城日誌1634年4月18日、27日）⁽³⁷⁾。

（表2）は、日本におけるオランダ船からの輸入額を示すものであるが、オランダ船からの輸入額の大半は、タイオワンからの生糸・絹であった。1634年に前年の約10倍に膨れ上がり、また合計額からタイオワンの輸入額が占める割合は前年の43.9%から76.3%に跳ね上がった。

また（図3）は、5年ごとの日本銀とマニラ銀の中国への流入量をあらわすものであるが、1631～1640年にかけての日本銀の流入量はマニラ銀を圧倒していた。この日本銀は、ほぼタイオワン経由で、中国に入ってきていた。

表2 日本におけるオランダ船からの輸入額（単位：グルデン、カッコ内数値は、年次合計100からの割合）

| 年次 | タイオワン | タイオワン以外 | 合計 |
|------|-----------------|---------------|----------------|
| 1633 | 56,901(43.9) | 72,726(56.1) | 129,627(100) |
| 1634 | 537,938(76.3) | 167,029(23.7) | 704,967(100) |
| 1635 | 839,461(83.2) | 169,801(16.8) | 1,009,262(100) |
| 1636 | 1,319,848(89.4) | 156,224(10.6) | 1,476,072(100) |
| 1637 | 2,042,302(85.3) | 352,526(14.7) | 2,394,826(100) |
| 1638 | 2,635,162(75.1) | 873,368(24.9) | 3,508,530(100) |
| 1639 | 3,042,484(88.1) | 412,282(11.9) | 3,454,766(100) |
| 1640 | 5,192,249(88.9) | 649,496(11.1) | 5,841,745(100) |

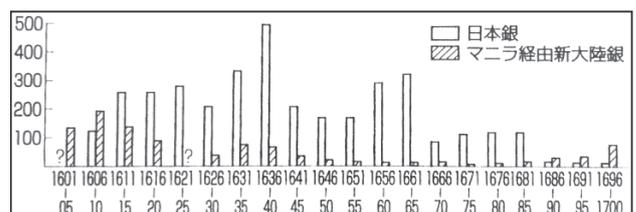


図3 日本とフィリピンから中国に流入した銀の推計（単位：トン）

すなわちハンブアンの活躍で復活した「出会い貿易」で、日中貿易（生糸⇄銀）の輸出入額は莫大なものになった。

また高等学校の世界史教育の授業において、(図3)は『詳説世界史図録第3版』にも記載されている資料⁽³⁸⁾であるが、筆者は、(表2)の資料と合わせて考察することで、生徒には1634年を境に、ハンブアンの活躍で復活したタイオワンの「出会い貿易」が、「銀の流入」に非常に大きな役割を果たしていたことを理解させることが出来ると思われる。

おわりに

本論稿は、ハンブアンがなぜ1633年のエラスムス湾の戦い(明・鄭芝龍対オランダ・海賊劉香)後「出会い貿易」を復活させることができたのかを考察することによって、海商ハンブアンの実像に迫り、タイオワンでの「出会い貿易」の意義を明らかにするものであった。エラスムス湾の戦いは、鄭芝龍がプットマンズと約束した1630年の「自由貿易協定」を明・鄭芝龍が守らなかったことが原因で起こった。

筆者は、ハンブアンがエラスムス湾の戦い後途絶えていたタイオワンでの「出会い貿易」を復活できたのは、①ハンブアンの政治力、②ハンブアンの漳州幫の海商としての実力、以上2点であると結論付けた。①については、明・鄭芝龍はオランダに「自由貿易」をにおわして、貿易の再開をもちかけた。ハンブアンは、明朝は海禁政策を国是とし、朝貢貿易と互市貿易しか許さず、中蘭貿易において「自由貿易」を約束することなどは不可能であることを百も承知していた。ハンブアンは、中蘭貿易について、無断でプットマンズと「自由貿易協定」を結んだ鄭芝龍の顔を立て、この協定の存在を福建巡撫に隠すために「口頭」で交渉をおこなった。その一方で「自由貿易協定」を結んだ本人の鄭芝龍には、「書簡」で、エラスムス湾の戦いの原因は、この協定を鄭芝龍が守らなかったことにあることを示して交渉をおこなった。②については、ハンブアンは講和交渉が進展しない中で、タイオワン事件の解決で日蘭貿易が復活し、中国商品が喉から手が出るほど欲しいプットマンズの信頼を強固なものにするため、自ら「出会い貿易」で中国商品の買い付けをおこなった。しかも、その買い付け資金は、海商ハンブアンとしては意に沿わない、日本銀ではなく、タイオワンの倉庫に眠っている現物(胡椒)での買い付けであった。ハンブアンが、中国商人も嫌がる現物(胡椒)で生糸・絹織物を購入した交渉力は、並みの海商では到底できないことであった。

筆者は、海商ハンブアンは、永積が論じたオランダのエージェント・海商にとどまらず、中央官僚の福建巡撫、土着官吏鄭芝龍、台湾長官プットマンズ三者の思惑を熟知し、幅広い人的ネットワークを利用して、政治力を発揮

した人物であったと考える。そういった意味では翁の論じるハンブアンが元中央官僚であった林亨萬であるという説は興味深い。

明朝はハンブアンの交渉によって復活したタイオワン貿易で、漳州幫のヨホ、ヨクシムと泉州幫のビンディオックの三人に交易許可証を与え、互市貿易をおこなった。しかし大量の軍事費(銀)欲しさに、なし崩し的に「出会い貿易」を黙認する形になった。またオランダも「出会い貿易」の形式には不満を持つものの、ハンブアンの活躍でタイオワンに大量の生糸・絹が入ってきたことで、明朝と同じくこの貿易スタイルを黙認することになっていった。

当時の明朝は、北辺の女真族(後の清朝)に対する軍事費(銀)を獲得することが、経済政策上最重要課題であった。その銀はタイオワンでの「出会い貿易」で入る日本銀であった。タイオワンの「出会い貿易」を巡って、中国は官民ともに全く一枚岩ではなく、また民の方も幫によって、「出会い貿易」の利権争いを繰り広げていた。そのドル箱であるタイオワンの「出会い貿易」の復活者がハンブアンであるという捉え方は、永積・翁ともにしていない。

『詳説世界史B』には、17世紀中国経済の最重要問題であった「銀の流入」において互市貿易の内容の記述はある。しかし筆者は、互市貿易よりも大きな役割を果たしたタイオワンの「出会い貿易」を、エラスムス湾の戦い後復活させた海商ハンブアンについて、永積・翁とは別の角度から新たに考察した。この考察は、新学習指導要領の世界史探究でいう「諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、アジア海域での交易の特徴を多面的・多角的に考察し、表現する」という生徒の活動の一助とすることができると思われる。

また海域史の視点から東アジア海域における琉球王国の役割の重要さは盛んに論じられ、授業実践でも取り上げられている⁽³⁹⁾。岡本弘道は「世界史を一体のものとして理解するうえで、海域史がきわめて有用なアプローチであることは間違いない」と論じている⁽⁴⁰⁾。この時代の台湾の役割は、オランダの東アジア貿易の新展開のポイントとなり、今後の東アジア海域史の実態解明にもつながり、世界史学習においても重要な教材となりうると考える。

今後は、翁佳音が指摘するハンブアン=林亨萬説を考えるうえでも、厦門塔頭^{とうとう}の林家の族譜等、中国史料を収集し検討していく必要がある。将来的に中国厦門の林氏宗祠及び厦門大学台湾研究所等を訪問し、資料収集・分析を行いたいと考える。

—注—

- 1 マレー半島のイスラム系王朝。
- 2 後期倭寇討伐で活躍した兪大猷の息子（『明史』巻212, 列伝100）。
- 3 泉州海防艦隊司令官。
- 4 快速帆船。
- 5 大型帆船。
- 6 中国や東南アジアで、主に海運で用いられた重量の単位。約60kg。担（たん）。
- 7 オランダ通貨。1グルデン=20スタイフェル, 1スタイフェル=16ペニング。

—文 献—

- (1) 壇上寛『陸海の交錯—明朝の興亡—』岩波新書シリーズ中国の歴史④, 岩波書店, p.142, 2020年。岩井茂樹『朝貢・海禁・互市』, 名古屋大学出版会, p.208, 2020年
- (2) 永積洋子編『鎖国を見直す』山川出版社, p.71, 1999年。永積洋子『近世初期の外交』創文社, pp.155-156, 1990年
- (3) 翁佳音「十七世紀東亜大海商亨萬（Hambuan）事蹟初考」『故宮學術季刊』22巻4期, 2005年, 『荷蘭時代—台湾史的連続性問題』稻郷出版社, p.190, 2008年
- (4) 『詳説世界史B』山川出版社p.182, 2016年
- (5) 海澄人李錦及奸商潘秀, 郭震, 久居大泥, 與和蘭人習。語及中國事。錦曰。若欲通貢市, 無若漳州者。漳南有澎湖嶼, 去海遠, 誠奪而守之, 貢市不難成也。其酋麻韋郎曰, 守臣不許, 奈何。曰。稅使高案嗜金銀甚, 若厚賄之, 彼特疏上聞, 天子必報可, 守臣敢抗旨哉。酋曰, 善。（『明史』巻325, 外国6）
- (6) 而案已遣心腹周之範詣酋, 説以三萬金餽案, 即許貢市。酋喜與之。盟已就矣, 會總兵施德政令都司沈有容將兵往諭。有容負膽智, 大聲論説, 酋心折（中略）酋乃悔悟, 令之範還所贈金, （中略）十月末揚帆去（『明史』巻325, 外国6）
- (7) 『明末福建省の高案に対する民変について』山根幸夫教授退休記念・明代史論叢, 上巻』明代史論叢編集委員会編, 汲古書院, pp.443-444, 1990年
- (8) 『バタヴィア城日誌』村上直次郎訳注・中村孝志校注1, 平凡社東洋文庫, p.20, 1975年
- (9) 翁佳音「十七世紀福佬海商」『中國海洋發展史論文集第七輯上冊』臺北: 中研院中山人文社會科學研究所, 1999年, 前掲書(3), p.168
- (10) 李旦, その他当時の海賊については, 松浦章『中国の海賊』東方書店, 1995年, 松浦章『中国の海商と海賊』世界史リブレット63, 山川出版社, 2003年に詳しい。
- (11) 翁佳音は, 九龍江（漳江）商人団と晋江（主要は安海）商人団という呼称を使っている。前掲書(3), p.190
- (12) 翁佳音は, 「この許心素（シムソウ）は, 総兵兪咨

- 皋によってサポートされている廈門の官僚と許心素の親類で双方からの商品の供給者を管理した」と述べた。前掲書(3), p.191
- (13) 前掲書(2)『近世初期の外交』pp.138-139
 - (14) 丁卯（1627年）四月, 鄭寇躡入, （中略）九月間, 兪將又勾紅夷擊之。夷敗而逃。鄭寇乘勝長驅。十二月間中左, 官兵船器, 俱化為烏有。全閩爲之震動。而泉中郷紳不得已而議撫。（靖海紀略巻之二）
 - (15) 烏附可攻毒, 而續命必藉參苓。鍼砭可偶試, 而養生必資五穀。閩之用芝龍, 烏附也, 偶試之鍼砭也（『靖海紀略』跋）。とあり, 鄭芝龍を帰順させることは「毒をもって毒を制す」という曹履泰の政略であった。
 - (16) 白井康太「十七世紀前半, 福建沿海の海商と海寇—漳州・泉州地域を中心として—」『九州大学東洋史論集』38, p.78, 2010年
 - (17) 李旦はアンドレア, 顔思齊はペドロ。翁佳音は, 「当時のカトリックに改宗した海商の研究は, 価値のある研究である。」と述べた。前掲書(3) p.169
 - (18) 翁佳音は, 「鄭芝龍は, なお完全に中国海域を独占はしていない」と述べた。前掲書(3) p.199
 - (19) 『バタヴィア城日誌』村上直次郎訳注・中村孝志校注3・平凡社東洋文庫, p.286, 1975年
 - (20) 『熱蘭遮城日誌第一冊』江樹生譯注・台南市政府發行, p.43, 1999年
 - (21) 翁佳音は, 「1630年以來, 安海幫は鄭芝龍によって台湾の貿易で地位を獲得した。しかし, 1631年段階では, 福建巡撫（熊文燦）の支持を得ていたが, まだ敢えて公然とオランダと共謀することはなかった」と述べた。前掲書(3) p.197
 - (22) 前掲書(8), pp.170-171
 - (23) 永積洋子は, 「鄭芝龍は, タイオワン事件後対日貿易がうまくいっていなかったオランダが, 幕府から出帆を許されたことをいち早く知り, 台湾での中国商品の需要が急増することを見通しており, オランダとの和解を謀ったのだろう」と述べた。前掲(2)『「鎖国」を見直す』, p.61
 - (24) 前掲書(8), p.172
 - (25) 前掲書(20), p.138
 - (26) 前掲書(20), p.149
 - (27) 前掲書(8), p.172
 - (28) 前掲書(20), p.141
 - (29) 前掲書(20), pp.143-144
 - (30) 前掲書(20), pp.148-149
 - (31) 前掲書(20), p.145
 - (32) 前掲書(20), p.146
 - (33) 前掲書(8), pp.178-179
 - (34) 前掲書(8), p.181
 - (35) 前掲書(8), p.187

- (36) 前掲書 (8), pp.188-189
(37) 前掲書 (20), p.159, p.161
(38)『詳説世界史図録』第3版, 山川出版社, p.106, 2020年
(39) 野村直美「琉球が動かした世界史－15世紀の東・東南アジア交易－」『世界史のしおり』2011年度3学期号, 帝国書院, 2012年
(40) 岡本弘道「世界史における「海域史」の可能性」『世界史のしおり』2014年度2学期号, 帝国書院, p.7, 2014年

—図版・表—

- 図1 自己作成
図2 永積洋子著『近世初期の外交』創文社, 索引・参考文献・註・地図p.50, 1990年を参考に自己作成
図3 岸本美緒『東アジアの近世』世界史リブレット13, 山川出版社, 1998年, p.17, 図2
表1 自己作成
表2 永積洋子著『近世初期の外交』創文社, 第6表p.195, 1990年を参考に自己作成